



コルナイ・ヤーノシュ自伝

コルナイ・ヤーノシュ著

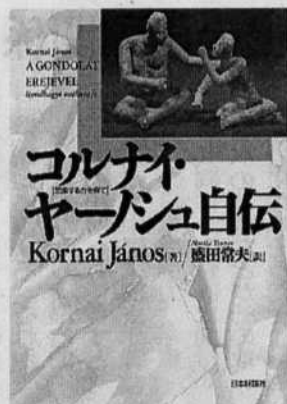
1冊

コルナイは、旧共産主義国ハンガリーの生んだ、東西を越えて巨大な影響力を持つ経済学者である(昨年まで世界経済学会連合の会長であり、また近年常にノーベル経済学賞の受賞者に擬せられている)。

作者は「メモワールとエッセイ集の合体したもの」と自身特色づける本書が「経済学者

や他の専門研究者、年輩者と若者、ハンガリー人と外

国人、東の人々と西の人々」などに、ひろく手にとられることを期待する。実際本書を一つの視点やテーマにのみとづいて評価することは難しい。多面的で、豊かな構造と内容を有しているからである。少なくとも次の三つの側面がある。



(盛田常夫訳、日本評論社・四、七〇〇円)
▼著者は28年ブタペスト生まれ。共産党機関紙記者、ハーバード大教授などを歴任し、現在はハーバード大名誉教授。著書に『社会主義システム』など。

経済学者の深く豊かな多面的思考

来しながら、マルクス主義、新古典派経済学理論の枠組みと、生きた経済の観察との間のギャップに悩み、そのなかから独自の体系を次々と構想していく、その思考の軌跡を描いた(私的)学説史としての側面である。彼による「ソフトな予算制約」という概念は、共産主義体制の崩壊を理解する鍵概念であったばかりか、日本の金融・財政危機の原因やその帰結を理解する上でも有用だ。欧米の大学や学界の風俗を垣間見るという面白味もある。

本書の原題は『思想の力を得て』であるが、政治権力や経済的富、マスコミなどから距離を置くことによ

一つは「ドナウの真珠」ともいわれるほど文化的に豊かだった国のナチによる突然の支配とユダヤ人の迫害作者の父親を含む、素朴な献身から分析的批判の対象へと転じてい言と歴史的洞察という側面である。側面も見逃せない。

第二は、東欧とハーバード大学とかなりの時間、読書に没頭するに値した本格的な知的作品である。

《評》スタンフォード大学名誉教授 青木 昌彦